

随泉寺寺報

平成 23 年（2011 年）7 月号 第 491 号

TEL 082-892-0217 <http://www.zuisenji.com/>

浄土真宗本願寺派 高峯山随泉寺

安居会法座

講師 浄福寺副住職 山下瑞円師

講題 『いのちの叫び』

■安居とは元々、梵語の雨期を日本語に訳したもの。

本来の目的は雨期には草木が生え繁り、昆虫、蛇などの数多くの小動物が活動するため、遊行（外での修行）をやめて一カ所に定住して修行や勉強をしました。それによって、小動物に対する無用な殺生を防ぐ意味でした。後に雨期のある夏に行う事から、夏安居（げあんご）、雨安居（うあんご）とも呼ばれるようになりました。



今この世のすべての生物を生かしているのが『いのち』です。私を呼吸させているのも、街路樹が芽吹くのも、同じ宇宙全体を動かしている同じ一つの“はたらき”に依っていますから、私と街路樹は同じ“いのちの仲間”だと言えます。仏教で、「天と地と我は一体だ」と悟りの心を言い表すことができますが、これも『いのち』のことを言っているのだと思います。

7 月の法座予定

7 月 10 日 掃除 望ヶ丘
7 月 14 日 昼席午後 1 時より 安居会法座
7 月 14 日 夜席午後 7 時より 出張法座 望ヶ丘集会所
7 月 15 日 朝席午前 10 時より 門信徒の集い おとき
7 月 15 日 昼席午後 1 時より 安居会法座
7 月 15 日 午後 3 時より 門信徒会婦人部役員会
7 月 24 日 午後 5 時より 随泉寺ビアガーデン
8 月 2 日 午後 1 時より 作品づくり
8 月 2 日 午後 6 時より 門信徒会本部役員会
8 月 3 日 午前 9 時より 少年少女の集い

☆少年少女の集い 一日研修会（小学 1 年～6 年）

8 月 3 日（水） 午前 9 時より

今年も昨年と同様 1 年生～6 年生まで合同の少年少女一日研修会を 8 月 3 日（水）に開催いたします。今年も出来るだけ楽しい企画を考えています。友達を誘ってたくさん参加してください。朝から夜までの一日ですが、1 年生～6 年生の人と一緒に楽しい一日が過ごせたらと考えています。時間が長いので 1 年生にとっては少しハードですが、夏休みの楽しい思い出になってくれたらと思っています。



☆随泉寺ビアガーデン 7 月 24 日（日）午後 5 時～

今年も 7 月 24 日午後 5 時から随泉寺ビアガーデンを行います。今年は入梅が 5 月ということで梅雨明けも間近という気がします。季節が一月早いという感がありますが、節電でサマータイムを導入している企業もあり、クーラーは控えめ運転で、その分、冷たい



いビールで暑い夏を乗り切りたいと思います。東北地方の被災された方々には申し訳ありませんが、売り上げを伸ばして、社会貢献をしたいと思います。

お寺は皆さんのものです。どうもお寺の敷居が、高いのではないかと思います。

まずはビールを飲んで、それから少しずつお寺に近づいてください。一人で恥ずかしい人は友達を誘ってきてください。

☆東北・関東大震災 安芸北組 23ヶ寺被災地救援活動

5 月に東北・関東大震災の支援を安芸北組全体で行うこととなり、ご協力をいただいた支援活動のお礼と報告が参りました。丁寧に 真まで添えて送っていただきました。よくみると随泉寺で下のコーナーで調達した T シャツや夏物のサンダルが っていたので間違いなく届いたのだとうれしく思いました。



6 月もレトルト食品がほしいということでしたので早速法座でお願いしましたら、沢山届けていただきました。またお金を寄付してくださった方がおられるので下のコーナーで購入して 真のように沢山送りました。これからも続けて支援するということですので、またお願いすることになると思いますが、ご協力よろしくお願い致します。

☆御礼

永代経懇志	金	拾萬円	川本 貞子殿	故	川本正様 25 回忌	特	永代経志として
永代経懇志	金	拾萬円	高橋 学殿	故	高橋 保子様	特	永代経志として
特 懇志	金	拾萬円	西川 ヒサエ様				

7月 いそぎ参りたき心のなき私こそ ご本願のお目あてであった

峠道でした。燃えるような美しい紅葉に見とれて突っ立っていました。ときどき、それが散っていくのですが、それがまた、おがみたくなるような、美しく尊い舞いなのです。

ところが、ふと気がついてみると、すぐ近くに、まだ小さい木なのですが、紅葉できないで、梢に、くすんだ色の枯れ葉が、しがみついているのがあります。力つきて梢から離れたのか、根元には、同じ色の葉が散っています。



それを見ていると、かつての日の私を思い出しました。ご本願が、ほんとうに届いてくださるなら、「死にともない心」など、おのずから、超えられるはずだという思いから、「死にともない心」と対決して苦しんだ日々のことでした。努めても、努めても、というよりは、努めれば努める程、強くなってくる「死にともない心」の根の深さに、とうとう力尽きて、深夜尊前に額ずいて、頭の上から私でした。

その私に、はっきり、聞こえてきてくださったのは、『歎異抄』第九章のおことばでした。「いそぎ参りたき心のなき者」「私」こそ、ご本願のお目あてであったという、あの驚きと、感激、それを思い出していると、枯れ葉の美しい舞いが、紅葉できないにかかわりなく、また、「いそぎ参りたき心」など、あるないにかかわりない広大なご本願を、お讃えする舞いのように思われてくるのでした。

「仏かねてしろしめして」

親鸞聖人の仏法が私たち在家止住（ざいけしじゅう；世間で暮らすより外無い一庶民と云う意味）の凡愚（ぼんぐ；自分を愚かだとも思えていない凡夫）に取って有難いところは、煩惱を肯定しないまでも、敵視していないところではないかと思えます。「仏法でも聞いて綺麗な心になりたい、人格を高めたい」と思って仏道に足を踏み入れるものですが、「なかなか煩惱は消えないなあー」と壁にぶつかるのが普通のパターンだと思われます。

曹洞宗のお坊さんで禅を究められ、親鸞聖人の教えをも求められた西川玄苔師の、

「仏法を聞いて、或いは坐禅をし続けて煩惱が無くなることは無い。むしろ、我が煩惱がはっきりとして来る」とのお言葉は、煩惱・妄念・妄想の暗闇で出遇う一条の光です。浄土真宗の法話で喩え話としてよくお聞きするのですが、『或るおばあさんがご住職に、「ご院家さん、わたし仏法を聞いて来たお蔭で、この頃腹が立たんようになりました」と感謝の挨拶をしたそうですが、それに対してご住職は「嘘をつ



け！」と言ったそうです。すると、おばあさんは烈火の如く腹を立てて帰って行ってしまった』と云う話です。もしそのおばあさんが腹を立たないようになったのが事実としても、それは周りの人々が、腹立て易いおばあさんに畏れをなして言い難いことを言わない様になったからかも知れませんね……。有り得ることではないでしょうか。

でも、仏法を聞いても仏法を聞く前と何も変わらなかったら意味は無いと思います。自分可愛さの自己愛や自分は正しいと云う自己中心症から、人からよく見られたい、損はしたくない、人から迷惑はかけられたくない、あの人は、否、世の中はもっとこうあるべきではないか等と、硬直した心で妄念妄想を働かす日暮しを送っているのですが、その自分の妄念妄想にいち早く気付けば、妄念妄想を重ねてとんでもないところに迷い込むことはなくなるのではないか、日常生活の色々な場で妄念妄想はスタートを切るが、仏法に依ってその妄念妄想の暴走を食い止められるのではないかと思ったりしています。いやいや食い止められない残念な私に気付かせて貰うのです。

源信僧都が「妄念はもとより凡夫と地体なり。妄念の外にに心はなきなり」と仰っているそのままだと思いますし、妄念妄想が全く起こらない様にはならないのです。そして、それを親鸞聖人は、「仏かねてしろめして煩惱具足の凡夫とおおせられたることなれば……」（歎異抄第9章）と仰せられたのです。

源信僧都が「妄念はもとより凡夫と地体なり。妄念の外にに心はなきなり」と仰っているそのままだと思いますし、妄念妄想が全く起こらない様にはならないのです。そして、それを親鸞聖人は、「仏かねてしろめして煩惱具足の凡夫とおおせられたることなれば……」（歎異抄第9章）と仰せられたのです。

☆西本願寺 新門様 大谷光淳様にご長男 敬様がご誕生

さる5月12日、ちょうど隨泉寺の御門との皆さんと一緒に京都の本願寺にお参

りしている最中、西本願寺の新門さま大谷光淳・るずみご夫妻に長男 敬（たかし）様がご誕生に成られました。

親鸞聖人750回大遠忌の年にお生まれになるとは、皆さんの記憶に残っていいでしょう。期待の中、自らの選択で門主として歩む方になっていただけたらいいと思います。

先人達が命がけで大切に維持してきた本願寺教団の現代的存在意義を問い続け、親鸞さまの教えを弘めるといふ重責を担っていただけるものと期待しています。

